

幼児教育者養成プログラムとしての組織キャンプの可能性

西島 大祐 (初等教育学科・講師)

The Potential of the Organized Camp as a Training Program for Future Preschool Teachers

Nishijima, Daisuke

Abstract

The organized camp provides children with various activities to meet nature and to experience challenges. This paper reports the educational effects of an organized camp experience on junior college postgraduates pursuing careers in early childhood education. Analysis of students' reports on their camping showed that nature experience has the potential to reconsider self-concepts and relationships with others as well as natural and living environments. Furthermore, it is possible that the students became deeply aware of the necessity of nature experience in early childhood education through their own experiences.

Keywords : Child Development, Outdoor Education, Organized Camp, Nature Experience, Adventure Education

キーワード：幼児教育、野外教育、キャンプ、自然体験、冒険教育

はじめに

近年、自然体験活動という言葉が様々な場所で使われるようになった。自然体験の必要性は幼稚園教育要領をはじめ、保育所保育指針や学習指導要領にも明記されている。自然体験の目標とするところは理科教材を教え込むのではなく(森上ほか、1999)、自然の大きさや美しさに感動する心、また思考力や好奇心・探究心など子どもの全人格的な発達を目指すものでなければならないといえる。

自然体験やチャレンジ体験など、組織キャンプを通して得られる体験は非常に多い。組織キャンプとは教育的なねらいをもって行うキャンプのことであるが、日本キャンプ協会(2006)は組織キャンプの要件を以下の6項目にまとめている。

1. 意図、目的を持って行われること
2. 組織的に行われること
3. 立案から実施までのプロセスを重視すること
4. 指導者が存在すること
5. キャンパー(参加者)を理解していること
6. 自然環境と野外での生活や活動があること

キャンプの種類や対象者は様々であり、それと同時に期間や目的も様々である。最近では青少年団体の実施するキャンプだけでなく、幼稚園や自然学校などが実施する幼児のキャンプも増えてきている。

キャンプに代表される野外での教育活動を野外教育と一般的に呼ぶが、近年では岡村(2000)が野外教育は環境教育と冒険教育の総合的な学習の場であると述べるなど、野外教育が環境教育と冒

険教育の融合されたものであるという見解が強くなっている。

環境教育とは自然環境の保全に対する行動や自然に対する理解などを目的とした教育方法であり、日本でもその実践はネイチャー・ゲームやプロジェクト・ワイルドなどの活動を通して盛んに行われている。

他方、冒険教育とはドイツ生まれのユダヤ人教育者Kurt Hahnの教育実践が始まりといわれている教育方法である。Hahnの教育実践は1941年ウェールズのアバドヴェイに設立されたOutward Bound School（略称OBS）の活動プログラムによって世界中に広まっていった。その活動例は教育を目的とした海洋活動や山岳活動、サバイバル経験、チャレンジ体験などが挙げられる。飯田（1997）は冒険教育を、自然の中で様々な困難やストレスを伴う活動を与え、それらを克服することによって感動や成功感を体験すると共に、自己に対する意識を向上させ、人間形成を図ることを目的とする活動であると述べている。近年冒険教育に関する実践報告や心理学的な側面からの研究は数多くされるようになったが、冒険教育という言葉が一般的に知名度を得ていない現状もある。

ところで鎌倉女子大学短期大学部専攻科初等教育専攻はより高度な実践力を持った幼稚園教諭や保育士の養成を目指している一年制の課程であるが、近年の子どもの野外教育に対するニーズの高さから2006年度より「キャンプ」という授業科目が実施されるようになった。「キャンプ」の内容は主に幼稚園教諭や保育の現場で働くことを目指す専攻科生を対象に、環境教育的及び冒険教育的なプログラムを含んだ組織キャンプが展開されている。

図は本授業科目で行ったキャンプの内容である。宿泊はすべてテント泊とした。

(図)

場所：国立妙高青少年自然の家
 日時：平成18年8月6日（日）～9日（水）
 人数：女子学生12名、指導者4名
 目的：野外キャンプを経験することで、その

知識と実践力を高めていく。また、野外を上手に活用することによって自然の偉大さや必要性を体感し、子どもたちの遠足や集団宿泊行事に対応できる指導力を身につけていく。

日程：

1日目	午後	集合 アイス・ブレイキング 野外炊事
	夜	ナイトシアター
2日目		妙高山登山
3日目	朝	野外炊事
	午前	アドベンチャー・プログラム
	午後	環境教育プログラム
	夜	キャンプ・ファイヤー
4日目	午前	ネイチャー・ゲーム 振り返り、テスト 解散

研究の目的

本研究は組織キャンプにおいて教育的プログラムを経験することによって、幼稚園教諭もしくは保育の現場で働くことを目指す学生にどのような気づきがあるのか捉えることを目的とした。また、野外教育の経験が学生の心にどう影響を与えるのかを検討し、幼児教育の現場での実用性に対する可能性を探った。

研究の方法

本研究では2006年度に実施された授業科目『キャンプ』に参加した12名の学生を対象にした。

授業実施後、学生には当日中に自由記述の「振り返りシート」へ記入をしてもらい、その提出を求めた。そしてその「振り返りシート」から学生の気づきにあたる記述部分を抽出し、「自分自身に対する気づき」、「人間関係に対する気づき」、「自然・生活環境に対する気づき」という3つの観点に分類を行い、整理・分析を行った。

結果と考察

「振り返りシート」を分析した結果、授業参加

者全員に何らかの気づきにあたる記述が示されていた。表は「振り返りシート」に示された気づきに対する分類の結果を整理したものである。気づきを示す記述が複数ある者はできる限り抽出し

た。また、表中で示す学生の記述はできるだけ原文のままとしたが、そのままだとわかりにくい表現に対しては筆者が加筆・修整をした。

(表 キャンプを通して得られた学生の気づき)

自分自身	<ul style="list-style-type: none"> ・「みんなはこんなふうに頑張っているんだ」、「この子はこんなところが素敵だな」と感じたことで、私ももっと頑張って素敵な人になろうと思った。 ・何かができるようになったというより、精神的な面で一歩前進できた。 ・自分の役割を常に意識し行動することで自信を得た。 ・感謝する心を忘れないようにしたい。 ・物事を達成した時の嬉しさを感じた。 ・自分のできることとしなければいけないことを常に考えることで自分の役割が見えると思った。 ・みんなの意見や思ったこと、感じたことを聞いて視野が広がった。 ・大きな課題を達成することで「私でもできた!」と自信が持てて、今までの悩みがたいしたことのように思えてきた。 ・充実感でいっぱいになった。 ・自分の視野がものすごく広がって、知らなかった自分を知ることができた。 ・みんなの物事に取り組む姿勢は自分自身の良い刺激になった。 ・山を頂上まで登ることができた時は達成感でいっぱいだった。 ・「できない」から「とりあえずやってみよう」という考え方に少しずつでも変えていきたい。 ・登山で得た達成感を困難にぶつかった時に思い出し、どんなことでも挑戦していきたい。 ・「自分は最後でいい」という気持ちから、思ったことを思った時に伝えようという意識が変わった。 ・登山を通して、あきらめずに頑張るんだという気持ちを持った。 ・これからは感じることを大切にしたい。 ・一人ではやり逃げられないことや日常生活では体験できないことをたくさん経験することによって、今まで持っていた人生観が大きく変わった。 ・山の頂上まで登れなかった悔しい気持ちが、たくさんの方に挑戦しようというきっかけになった。 ・挑戦しようという気持ちが今までよりもずっと強くなった。 ・挑戦しようとするみんなを見て、勇気づけられた。 ・自信がつき、これからの自己形成の土台となった。 ・言うこととすることを少しでも近づけるようにしていきたい。 ・チャレンジする気持ちを大切にしたい。 ・集団の中で自分の役割を誠心誠意こなそうと思った。 ・思いやりの心を忘れることなく、日々の生活を過ごしていきたい。
人間関係	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで山登り、炊事、テント泊などいろいろなことに挑戦したことが印象的だった。 ・それぞれの人が様々な場面で顕著に表れていた。 ・みんな違って良いと実感した。 ・仲間がとても大切に思えた。 ・仲間との信頼関係が深まり、より絆が深まった。 ・みんなと心をつなげて頑張る取り組みの素晴らしさを感じた。 ・一人一人個性があり、その個性を認めることが大切だと思った。 ・山を登っている時に仲間意識を感じ、嬉しい気持ちになった。

人間関係	<ul style="list-style-type: none"> ・参加しているメンバー全員が一つになって活動を達成する大切さを感じた。 ・自分を支えてくれる友達がたくさんできた。 ・人は一人ではできないことでも、仲間がいればできることが無限に広がっていくと感じた。 ・助け合える仲間を持った。 ・仲間と同じ気持ちになることで達成感が大きくなるのだと感じた。 ・一人でできないこともみんな協力して助け合えばできるようになると感じた。 ・相手のことを理解し、認め合い、信頼関係を築き上げていくことができればとても良いと思った。 ・これまで人を頼ることが人に迷惑をかけることだと考えていたが、迷惑をかけてこそその仲間であると感じ、頼れる人がいることの嬉しさを実感した。 ・人は一人では生きていけないと感じた。
自然・生活環境	<ul style="list-style-type: none"> ・空のきれいさ、木陰の気持ちよさ、きれいな緑、朝の気持ち良さ、昼間の楽しさ、夜の静けさなどの自然環境を実感できた。 ・日常のいろいろな事に対する見え方がキャンプに行く前と後では変わった。 ・自分のことを人に伝えられる大切な時間があった。 ・キャンプや登山でのマナーやルール、現代の課題などを学ぶことができた。 ・植物も一つ一つが個性を持って存在しているのだと感じた。 ・自然の中で体を動かすことにより、肌身を通して実感することが多かった。 ・時間に追われる日々から離れることで、実家での生活を思い出した。 ・自然を少しでも大切に努力を心がけたい。 ・子どもを豊かな自然環境へ導いていきたい。

自分自身に対する気づきでは、「どんなことでも挑戦していきたい」、「チャレンジする気持ちを大切にしたい」、「視野が広がった」というようなチャレンジ精神や自己発見に関する変化の記述が見られた。「山の頂上まで登れなかった悔しい気持ちだが、たくさんすることに挑戦しようというきっかけになった」という学生は最終的に山を登頂できなかった学生であるが、そういった経験からも肯定的な気持ちが表れていた。また、「達成した時の嬉しさを感じた」というような達成感に関する記述や、「自信」、「誠心誠意」、「思いやりの心」など個人の内面の変化に関する記述も多く見られた。

人間関係に対するものでは、「個性を認めることが大切だと思った」、「相手のことを理解し、認め合い、信頼関係を築き上げていくことができればとても良いと思った」など個性の尊重や他者の理解に対する内面の変化が見られた。また、「仲間がとても大切に思えた」、「一人でできないこともみんな協力して助け合えばできるようになる

と感じた」など仲間意識に関するものや社会生活を意識するような記述も見られた。

自然・生活環境では「空のきれいさ、木陰の気持ちよさ、きれいな緑、朝の気持ち良さ、昼間の楽しさ、夜の静けさなどの自然環境を実感できた」というような自然環境そのものに対する気づきと、「時間に追われる日々から離れることで、実家での生活を思い出した」というような自然と自分の生活環境との関係に対する気づきなどが見られた。

今回の授業を通して、各々の学生には自他との関係及び自然・生活環境などに対していろいろな気づきがあったということが出来る。組織キャンプでの自然体験によるいろいろな気づきは、自分自身を含む、自分を取り巻く現象世界の各要素を変容させたということが出来るだろう。また、それらの変容によって学生はこれからの生活に前向きな影響を与えるきっかけを掴んだ可能性が高いとも考えられる。幼稚園や保育の現場で働くことを目指す学生にとって、この組織キャンプには幼

児教育の現場で生かされるべき多くの要素があったと考えられるのである。

特に今回の組織キャンプにおけるいろいろな気づきは、『幼稚園教育要領』の定める「自然などの身近な事象への興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うようにすること」や「多様な体験を通じて豊かな感性を育て、創造性を豊かにするようにすること」などの幼稚園教育の目標に結びつく内容であったといえる。学生自身が自然体験や組織キャンプの中で感じたことを幼児教育に生かすことで、子どもの自然体験がとても有意義で実のある活動になるのではないだろうか。

今回の組織キャンプでは参加者全員で一つの課題を達成するようなアドベンチャー・プログラムによって「挑戦しようという気持ちが今までよりもずっと強くなった」というような気づきや、自然を身近に体験できる環境教育的プログラムによって「自然を少しでも大切に努力を心がけた」というような気づきの機会があった。これらのような体験から得た気づきは教育的目的を持たないレジャー・キャンプやファミリー・キャンプでは得にくいものだろうし、目的が明確でないキャンプなどでも得にくいといえるだろう。

幼稚園教育に求められる自然体験を実践するためには、幼児教育者の自然体験に対する高い知識と理解が必要となるのではないか。自然体験に対する専門的知識のある指導者が目的を持った環境教育的・冒険教育的な野外活動をプログラムの中に取り入れることによって、初めて自然体験が意味を持つ教育活動になると考えられるのである。

結論

短期大学部専攻科の授業で組織キャンプを体験した学生の気づきの内容を「振り返りシート」から調査・分析した結果、以下のことが明らかになった。

(1) 幼稚園教諭もしくは保育の現場で働くことを目指す学生の自然体験における様々な気づきは、自分自身を含む、自分を取り巻く現象世界の各要素を変容させる可能性のあ

ることがわかった。

(2) 学生の自然体験は、幼児の自然体験の必要性を理解する上で必要である可能性が高いと考えられた。

幼児教育者は子どもに自然体験の重要性を伝えるにあたって、幼児教育者自身に多くの自然体験や野外教育の経験があることが望ましいと考えられる。幼児教育者が自然体験に対して十分な理解や経験がないとすれば、子どもに対してその重要性を示すことは難しいだろう。反対に自然体験に対する十分な理解と経験のある幼児教育者がいるとすれば、その教育を受ける子どもたちは自然を上手に活用しながら成長できる可能性が高くなるだろう。故に幼児教育者の自然体験に対する経験と理解は、子どもの自然体験の内容に大きな影響を与えると考えられるのである。この先、幼児教育者養成に必須のプログラムとして、組織的自然体験の位置づけを考えていく必要があるのかもしれない。

本研究では今後、幼児教育者の自然体験が幼児に対して具体的にどのような影響を示すのかを活動やプログラムの内容にも注意しながら追跡調査し、幼児教育における自然体験や野外教育の可能性に対して見地を深めていきたいと考えている。

参考文献

- 1) 文部省『幼稚園教育要領解説』1999、フレーベル館
- 2) 石井哲夫、待井和江編『改定保育所保育指針全文の読み方』全国社会福祉協議会、2000
- 3) 文部科学省『小学校学習指導要領解説—総則編』東京書籍、2004
- 4) 森上司朗、高杉自子、柴崎正行編『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、1999、p.123
- 5) 日本キャンプ協会編『キャンプ専門科目テキスト』日本キャンプ協会、2004
- 6) 岡村泰斗『野外教育から見た環境教育・冒険教育』青少年問題8巻、2000、p.12-19
- 7) 降旗信一『ネイチャーゲームでひろがる環境教育』中央法規出版、2001
- 8) 石川道夫『クルト・ハーンとアウトワード・バウ

ンド』教育新世界第50号、2001、p.60

- 9) Hahn, Kurt. (1957). *ORIGINS OF THE OUTWARD BOUND TRUST*, Evans, The Year Book of Education, p.1.
- 10) Röhrs, H. (1966). *Kurt Hahn*, London Routledge & Kegan Paul.
- 11) Flavin, Martin. (1996). *KURT HAHN'S SCHOOLS & LEGACY*, THE MIDDLE ATLANTIC PRESS.
- 12) Skidelsky, Robert. (1975). *Schulen von gestern für morgen*, Hamburg, Rowohit Taschenbuch Verlag GmbH.
- 13) 飯田稔『生きる力を育む冒険教育』女子体育 8 巻、1997、p.9
- 14) 原田純子、益田悦子『身体活動における冒険教育の可能性—ロッククライミング、沢登りを事例として—』大阪女学院短期大学紀要30号、2000、p.129~142

要旨

子どもたちは組織キャンプによって自然体験やチャレンジ体験などのさまざまな体験活動を行うことができる。本研究では短期大学部専攻科の授業で組織キャンプを体験した学生を対象にして、野外教育の経験が幼児教育の現場で働くことを目指す学生の心にどのような影響を与えるのかを検討した。実施後の振り返りシートをもとに調査・分析を行った結果、組織キャンプにおける様々な自然体験は、自他との関係及び自然・生活環境などに対して変容を導く可能性のあることがわかった。また、学生が自然体験への理解を深めることによって、幼児教育に対する理解を深められると考えられた。

(2006.10.30 受稿)